

“他者への想像力”を

日韓の歴史認識をめぐる問題にジャーナリストと共に目を向けて

組織ジャーナリズム・メディアの報道に接する日々において、政権に対する「忖度」やフェイクニュースの横行など目を覆うばかりの状況に不信感や危機感が高まっています。長年メディアの中で活動してきたベテラン(?)のおじさん・おばさんたちも危機感を共有してきました。そこから、ジャーナリストを目指す若い人たちに「権力を監視し、市民の側に立つ」という姿勢を育んでもらおうと、「ジャーナリストを目指す日韓学生フォーラム」の活動が3年前から始まりました。

なぜ「日韓」なのか。日韓の間には、従軍慰安婦や徴用工の人たちのこと、強制労働など、今も「歴史認識」をめぐる問題が横たわっています。その解決のためには、まずお互いが相手を学び、理解していくことが必要です。その行為は、ジャーナリストにとって大切な“他者への想像力”に思いを寄せることにもつながります。ジャーナリストが日々伝える「今」の一つひとつは、「過去」つまり歴史を背負っています。そこに目を向けられるようなジャーナリストが日本で、韓国でニュースを発信していければ、今のメディアは少しずつ変わっていくのではないかと。そんな日韓学生フォーラムの試みをもとに、日韓の皆さんと歴史認識を共有する道を探っていければと思います。

■ ゲスト： 植村隆さん



1958年、高知県生まれ。早稲田大学政経学部卒、1982年、朝日新聞社入社。大阪社会部記者などを経て、テヘラン、ソウル特派員。北海道報道部次長や外報部次長などを経て、北京特派員、函館支局長など。2014年、早期退職。2017年秋に「ジャーナリストを目指す日韓学生フォーラム」をジャーナリスト仲間たちと立ち上げる。また現在まで、2016年より韓国カトリック大学客員教授、2018年より週刊金曜日発行人兼社長、2019年6月から「金曜ジャーナリズム塾」塾長も務める。

■ ゲスト： 西嶋真司さん



1957年生まれ、早稲田大学卒。81年に「RKB毎日放送」入社。記者として報道部に配属され、91～94年にJNNソウル特派員。2000年に制作部に異動し、ドキュメンタリー番組を制作。18年に退社し、映像制作会社「ドキュメント・アジア」を設立。ドキュメンタリー映画の代表作に『抗い 記録作家 林えいだい』。現在は元朝日新聞の植村隆記者のバッシング問題をテーマにした映画『標的』を制作中。

■ 「ジャーナリストを目指す日韓学生フォーラム」に参加し、現在メディアで働く記者や学生も出演します

*同時通訳(日本語・韓国語)をいたします。

■日時：2020年10月31日(土) 13:30～16:00 ※受付時間13:00～13:25

■会場：オンライン開催

※オンライン会議システム・Zoom(言語通訳機能付き)を使用。スマホやPC等の端末から参加いただけます。参加方法の詳細は、お申込みくださった方に10月26日までにメールいたします。グループ対話セッションや、ゲストとの対話も行う予定です。聞くだけの参加も可能ですが、この対話の場を一緒につくれるよう、お声を出していただけましたら幸いです。参加者さまのお顔は写らないよう初めはこちらで設定しますが、グループ対話中は、自主的にお顔を写していただけます。

■参加費：無料 ※先着50名様。申込締め切り：20年10月25日または定員に達した時点の早い方。

■主催：認定NPO法人まちぼと ソーシャル・ジャスティス基金(SJF) <http://socialjustice.jp/> メール info@socialjustice.jp

■お申込みページ：<https://socialjustice.jp/20201031.html> ※完全事前登録制。当ページからのみ受付